日本銀行の建物　その歴史と変遷について　5

支店建物の変遷

日本銀行文書局技師　中村茂樹

旧小樽支店建物外観

日本銀行は、現在本店のほか三二の支店を全国に配置していますが、戦時体制の下で支店増設が始まる一九三〇年代半ばより前に開業した支店はそのほぼ半数の一七カ店でした（図1）。上の写真はその中の一つ、明治末期に建てられた旧小樽支店の新築時の姿です。支店が廃止された現在も、当時の姿を残したまま日本銀行の広報施設（金融資料館）として保存活用されています。今回は明治期から昭和初期に建てられた支店の建物を紹介します。

最初の支店建物・西部支店

日本銀行は明治十五年（一八八二）の創業から明治三十二年（一八九九）までに大阪を始め西部（現北九州）、函館、小樽、京都、名古屋、福島の各支店・出張所を開設していきますが、いずれも既存の建物を借り入れまたは購入しての開業でした。

永代橋のたもとの借入建物で開業した本店が、一四年後の明治二十九年（一八九六）、日本橋に本店建物を完成し移転することにより、ようやく支店建物の建築に取り掛かることになります。

最初に建築された支店建物は西部支店でした（写真1）。

西部支店は九州・中国地方の金融を円滑にするために明治二十六年（一八九三）、大阪支店に次ぐ二番目の支店として設置されます。設置予定の門司が鉄道開通直後でまだ市街が整わなかったため、対岸の赤間関（現下関市）に仮店舗を設け、門司の市街地整備を待って新築移転することになります。

西部支店の初代支店長は、日本橋本店建築工事の事務主任から転任した高橋是清で、仮店舗の整備と新築移転計画に対し手なれた手腕を発揮しました。

建築工事は、本店建築の完成を待って、明治三十年（一八九七）に着手し翌明治三十一年九月に完成しました。

本店に引き続いて工事監督を委ねられた辰野金吾は、本店建築時の腹心であった葛西萬司（注1）と共に、二つの半球型ドーム屋根に特徴を持つレンガ造り二階建ての本格的な石造洋風建築を造り、当時、洋風建築がまだ珍しかった中で地元の驚嘆を受けました。

後に辰野の高弟として、日本銀行建築に深いかかわりを持つ長野宇平治も工事の途中から参画しています。

完成された古典様式・大阪支店

西部支店に続く支店建築は大阪支店です（写真2）。

大阪支店は明治十五年（一八八二）十二月の開業時に借り入れた仮店舗から二年足らずの明治十七年（一八八四）に東区大川町の建物を購入して移転しました。当初はこの大川町に新店舗を建築する予定でしたが、方針を変更し現在の北区中之島を支店の場所として定めました。中之島はかつての米穀取引の中心地で、再び金融の中心地に選ばれました。

西部支店の完成を待つように、明治三十一年（一八九八）十二月に工事に着手し明治三十六年（一九〇三）一月に完成しました。設計は引き続き辰野に委ねられま

写真２　大阪支店

写真１　西部支店

図１　昭和初期（昭和13年〈1938〉）までに開業した支店

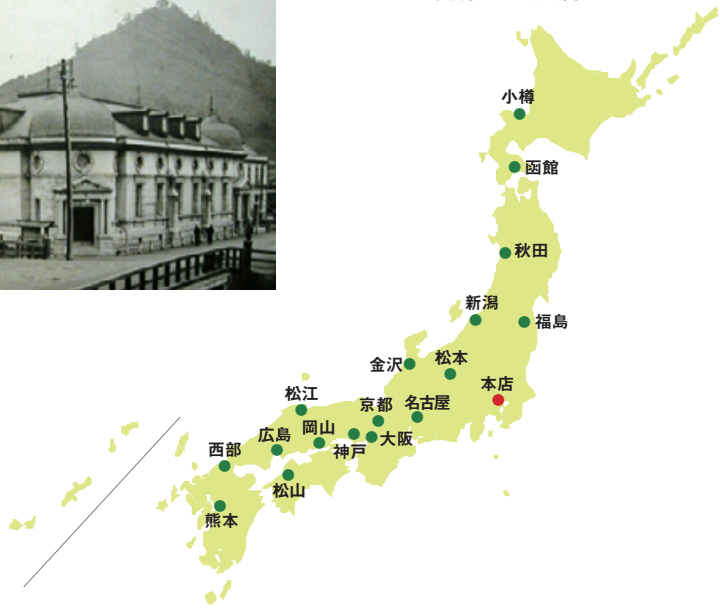


写真３　名古屋支店

写真４　京都出張所（支店）

写真５　初代の広島出張所（支店）

すが、この大阪支店の工事から辰野のかかわりが変わります。明治三十一年に帝国大学工科大学学長となった辰野は多忙なため工事監督を辞し、この時以降、工事顧問としてかかわっていきます。本店以来の腹心である葛西も日銀を辞し、現場監督は日本銀行技師長となった長野に委ねられました。

大阪支店の建物は、本店本館と同じ石積みレンガ造りの古典様式で建てられました。

古典様式として本店本館と比べると、大阪支店は外観および平面計画にシンメトリーをより巧みに取り入れることにより、より洗練されて完成度が高いと言われています。

双子兄弟の名古屋支店と京都支店

本店と大阪の新店舗が完成したことにより、これより先は仮店舗で開業した各支店・出張所の新店舗を建設することになります。

まず名古屋支店（写真３）と京都出張所（写真４）の新店舗が同時に計画されました。

名古屋支店が明治三十六年（一九〇三）九月に着工して明治三十九年（一九〇六）六月に完成し、京都出張所が同じ明治三十六年九月に着工してほぼ同時の明治三十九年七月に完成しています。

建物は、本店から大阪まで引き継がれた石積みレンガ造りのいわゆる石造系建物ではなく、両店舗ともレンガ本体を外壁とするレンガ系建物です。外観および平面計画とも非常に似通ったもので双子の建物とも言えます。

大阪以降工事顧問となった辰野は、帝国大学工科大学学長を辞した後、明治三十六年（一九〇三）に辰野葛西建築事務所（注2）、さらに明治三十八年（一九〇五）に大阪辰野片岡建築事務所（注3）を開設し、民間の設計活動に本腰を入れていきます。

名古屋と京都がレンガ系建物となった背景には、後に辰野式（注4）と言われる辰野の民間事務所時代のデザイン趣向があるとも言われています。むしろこの二つの支店建物が、後の東京駅に続いていく辰野式デザインを確立したと言えるかもしれません。

この間、明治三十七年（一九〇四）に日露戦争が勃発したことにより、出征基地となる広島の国庫事務が急増したため、明治三十八年（一九〇五）に広島出張所（写真５）を急遽（きゅうきょ）開設しました。開設ま

での時間的猶予がないため、木造による工期が僅か四カ月余の突貫工事でした。

明治期最後の支店建物・小樽支店

日露戦争の結果は北海道の各支店にも影響を与えました。派出所からスタートした小樽は樺太開発の中継地として道内商業の中心地に浮上し、明治三十九年（一九〇六）の支店昇格に伴う業務拡大に対応すべく新店舗の建築が行われました。

建築工事は明治四十二年（一九〇九）七月に着工して明治四十五年（一九一二）七月、まさに明治期最後に完成しました。

構造はレンガ造りにモルタルを塗った石造風建物で、望楼に特徴を持つ古典様式です。営業場（写真6）の柱をなくすための鉄骨小屋組みや、屋根下地に防火のためのコンクリートを用いるなど、当時の最新建築技術を用いています。大阪支店に次ぐ工事費を掛けたことからも、当時の小樽支店の重要性が分かります。

小樽に前後して函館と福島の支店建築を終えるところで、大正元年（一九一二）、辰野と長野を中心とした日本銀行の建築組織はいったん解散します。

大正期から昭和初期の支店建物

明治末期から大正中期にかけて、金沢、新潟、熊本等六つの支店が開設されます。いずれも木造ながらモルタル塗りや化粧レンガ貼りによる多様な洋風建築で地方都市に異彩を放ちました。

そして、大正期最後の支店として岡山支店が開設され、長野に再び設計が委ねられます。長野は日本銀行を辞した後、自営の建築事務所を開き、銀行建築の第一人者として民間の銀行（注5）を数多く手掛けていました。辰野の下で培った古典様式を成熟させた長野は、辰野の没後に建てられた最初の支店となる岡山支店で独自の古典様式を確立しました（写真7）。

関東大震災以後、レンガ造りの建物が姿を消していく中、大正十一年（一九二二）に完成した岡山支店は、支店建物としてだけでなく国内の建造物でも最晩年のレンガ造り建物と言われます。

本店の震災復旧を機に、日本銀行の技師長に戻った長野は、本店増築とともに、神戸支店を最初として、松山、広島（写真8）および松江支店（写真9）において古典様式の銀行建築を究極までに完成させていきました。

建設技術の発展に伴い、函館支店から構造は鉄筋コンクリート造りに代わり、更に松山支店から従来別棟であった金庫を本館の地下に取り込む、現在の支店建物の基本形が生まれました。

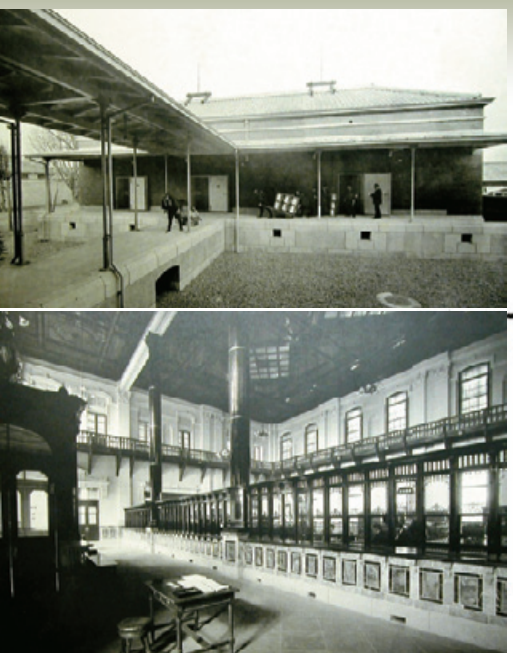
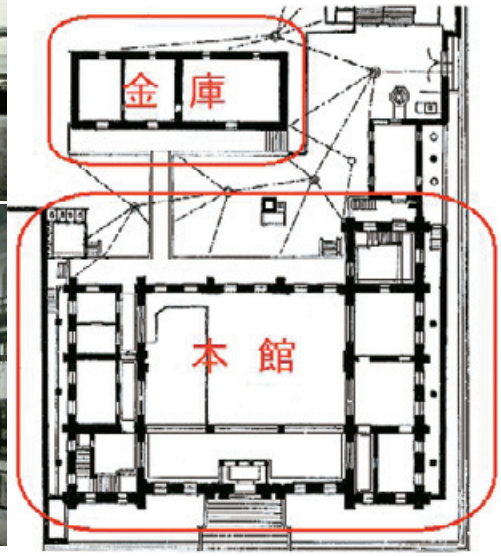


図2 本館と金庫配置（京都出張所）

昭和２年（1927）築の神戸支店まで、支店はすべて本館と別にレンガ造りの金庫を設けていました。



（上）写真６　小樽支店（営業場）、（下）写真７　岡山支店

文化財建物としての保存

西部支店および名古屋支店が戦災で焼失したほか、その他の支店でも建て替えに伴って取り壊される例も多く、昭和初期までの支店建物の中で現存するものは、大阪、京都、小樽、岡山、函館、広島、松江の七つです。

表　昭和初期（昭和13年〈1938〉）までに建てられた支店建物

建物名	建築年	開業年	構造・仕上	階数	現在施設名
西部支店 ⇒ 門司支店	明治31年	明治26年	レンガ造り・モルタル	2階	
大阪支店	明治36年	明治15年	レンガ造り・石	2階	大阪支店旧館
広島出張所 ⇒ 支店（初代）	明治38年	同左	木造・モルタル	2階	
京都出張所 ⇒ 支店	明治39年	明治27年	レンガ造り	2階	国重要文化財・京都文化博物館別館
名古屋支店	明治39年	明治30年	レンガ造り	2階	
金沢出張所 ⇒ 支店	明治42年	同左	木造・モルタル	2階	
函館支店（2代目）	明治44年	明治26年	木造・モルタル	2階	
小樽支店	明治45年	明治26年	レンガ造り・モルタル	2階	市指定文化財・金融資料館
福島支店	大正元年	明治32年	レンガ造り・モルタル	2階	
新潟支店	大正3年	同左	木造・モルタル	平屋	
松本支店	大正3年	同左	木造・モルタル	平屋	
秋田支店	大正6年	同左	木造・化粧レンガ	平屋	
熊本支店	大正6年	同左	木造・化粧レンガ	平屋	
松江支店（初代）	大正7年	同左	木造・化粧レンガ	平屋	
岡山支店	大正11年	同左	レンガ造り（一部RC造り）・石	2階	国登録有形文化財・ルネスホール
函館支店（3代目）	大正15年	明治26年	鉄筋コンクリート造り・人造石	3階	函館市北方民族資料館
神戸支店	昭和2年	同左	鉄筋コンクリート造り・人造石	3階	
松山支店	昭和7年	同左	鉄筋コンクリート造り・人造石	2階・地下1階	
広島支店（2代目）	昭和11年	明治38年	鉄骨鉄筋コンクリート造り・石	3階・地下1階	市重要文化財・旧広島支店
松江支店（2代目）	昭和13年	大正7年	鉄筋コンクリート造り・人造石	3階・地下1階	カラコロ工房

＝現存する建物を示す。建物名欄の（　）内は同一支店における建築年順を示す。西部支店は門司支店と改称（現北九州支店）。

（写真上）金庫
（写真下）営業場

大阪は本店本館と共に現役を務めていますが、ほかの六つの支店建物は銀行業務の役目を終えた後も、地元の声に応えてさまざまな形で保存活用されています（表）。

今年の四月から、築後一〇〇年を迎える旧小樽支店（現金融資料館）に対し、経年劣化に対応した改修工事を行うことをお知らせして、今回の連載を終わります。

五回の連載で日本銀行の建物の歴史を駆け足でご紹介しました。これを機会に日本銀行の建物に興味を持っていただけると幸いです。

（注1）文久三年（一八六三）盛岡市に生まれる。明治二十三年（一八九〇）帝国大学工科大学を卒業後、日本銀行技師として本店本館、西部支店、大阪支店の設計を担当。終生、辰野金吾の腹心として活躍。出身地盛岡の旧盛岡銀行本店（重要文化財）は代表作の一つ。

（注2）辰野金吾と葛西萬司が共同で東京に設立した設計事務所。辰野の全作品の過半を設計し、代表作に東京駅（重要文化財）、旧国技館がある。

（注3）辰野金吾と片岡安が共同で大阪に設立した設計事務所。明治期における関西最大の設計事務所。片岡安は明治九年（一八七六）金沢に生まれ、明治三十年（一八九七）帝国大学工科大学を卒業後、日本銀行技師として大阪支店の設計にかかわる。事務所の代表作に旧日本生命九州支店（重要文化財）、奈良ホテルがある。

（注4）辰野金吾が得意とした、赤レンガに白い花崗（かこう）岩を帯状に巡らしたフリークラシックの様式。

（注5）大正期だけで、旧三井銀行神戸、下関、広島各支店、旧明治銀行本店、旧鴻池銀行本店、旧六十八銀行奈良支店等二〇近い銀行建築を手掛けている。

＊写真は冒頭の写真および写真6以外は、日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵。

（上）写真8　2代目の広島支店。現存する被爆建物の一つ。堅牢（けんろう）な鉄骨鉄筋コンクリート造りで、爆心地の至近距離ながら倒壊を免れた。（下）写真9　2代目の松江支店　本店増築棟と共に長野宇平治の遺作